

三國人物遺跡初探

——傳承土壤との關連において——

土 屋 文 子

一 序

(a) 調査の目的

今日、一般には單一の總體として取り扱われることの多い三國故事だが、その中には複数の異なった傳承系統があり、各々傳承の背景となる土壤を有している可能性¹⁾がある。

傳承系統の差異の例として具體的に想定できるのは、傳媒や故事の傳播地域などである。ことに人物單位でみた場合、各人物の故事には、それぞれの出身地や活動範圍など、特定の地域との強い關連があろう。

人物故事の地域性を探る糸口として、無視できないのが地方志の記述である。古方志にはしばしば、『演義』をはじめ

とする作品に採られていない傳承、あるいはその痕跡が何え、これを他の文獻と關連づけければ、故事の亡佚した形態を推測するための材料となるだろう。

三國故事にまつわる遺跡は、最近、觀光地として注目を集め、『三國演義辭典』、『三國大觀』などの事典にも、項目を設けて収録されているほか、流行に乗って新たな觀光名所が次々に建設される珍現象すら生んでいるが、所謂「遺跡」を歴史的根據のある史跡ではなく、故事の發現形式の一種と考えるならば、これもまた三國故事の發展の一形態と見ることでできる。實際、こうした現象は今日に限ったことではなく、歴代の地方志を一瞥すれば、そこに記載される遺跡數の消長が伺える。

そこで本稿では、これらの中で全國を網羅的に扱った總志

のうち、清代までの代表的なものを材料として、主要な人物遺跡の分布を整理・概観し、故事の發展と地域性を探る足掛かりとしてみたい。

(b) 調査方法

一定の分量をもつ單行の總志で、全國規模の内容を備えたものには、唐・李吉甫『元和郡縣志』四十卷、北宋・樂史『太平寰宇記』二百卷と王存『元豐九域志』十卷、歐陽忞『輿地廣記』三十八卷、さらに『大元大一統志』一千三百卷、『大明一統志』九十卷、『大清一統志』五百／五百六十卷が挙げられる。本稿ではこのうち、殘缺が多い『大元大一統志』と、分量の少ない『元豐九域志』『輿地廣記』を除く四種を使用する。

人物遺跡の算定基準は、①舊宅(宮殿遺址を含む)②古戰場(當該人物が主役となったもの)③事跡遺址④冢墓⑤祠廟とし、検討對象とする人物は、資料毎に記載された遺跡數の多いもの各五名を採った。その内譯は以下の通りである。

- 元和郡縣志 一位：曹操①
 二位：諸葛亮②
 三位：鄧艾③

三國人物遺跡初探(土屋)

- 四位：姜維④
 五位：關羽⑤／孫權⑥
 一位：曹操
 二位：諸葛亮
 三位：孫權／鄧艾

大明一統志

- 一位：諸葛亮
 二位：曹操
 三位：關羽／劉備
 五位：張飛⑧

大清一統志

- 一位：諸葛亮
 二位：關羽
 三位：劉備
 四位：曹操／張飛

二 遺跡の數量的考察

前項に名の擧がった八人について、各資料毎の遺跡數の推移を一覽したものが、次の【圖一】である。

なお、ここで扱う遺跡數は、あくまで特定の總志に採録されたという記録であって、その推移が必ずしも遺跡自體の發

【圖I】 三國故事主要人物と遺跡數の推移

	元和都縣志	太平寰宇記	大明一統志	大清一統志
諸葛亮	13(18)	16(9)	89(27)	170(29)
關羽	2(3)	1(1)	23(7)	35(6)
劉備	1(1)	6(3)	24(7)	24(4)
曹操	14(20)	18(10)	24(7)	22(4)
張飛	0(0)	3(2)	11(3)	22(4)
孫權	2(3)	8(5)	21(6)	20(3)
姜維	3(4)	6(3)	8(2)	12(2)
鄧艾	4(6)	8(5)	5(2)	3(1)
遺跡總數	72	173	329	590
上位4人	31(43)	50(29)	160(49)	252(43)

※ () : 遺跡總數に對するパーセンテージ (小數點以下四捨五入) 數人物に関わる遺跡は、それぞれの項に算入しているので、個人遺跡の總計と遺跡總數は必ずしも合致しない

生/消滅を意味しないことについては留意の必要がある。

(a) 遺跡の増加と減少
絶對數、割合ともに増加しているものが、諸葛亮・關羽・

【圖II】 人物遺跡中の祠廟數

	元和	太平	大明	大清
諸葛亮	0	2(12)	19(21)	49(29)
關羽	0	1(100)	11(48)	22(63)
劉備	1(100)	0	7(29)	10(42)
曹操	0	1(5)	5(21)	0
張飛	—	2(67)	7(64)	14(64)
孫權	0	0	8(35)	10(42)
姜維	0	0	2(25)	4(33)
鄧艾	2(50)	3(38)	4(80)	1(33)

※ () は遺跡總數に占めるパーセンテージ

劉備・張飛・孫權と過半數を占める。資料そのものの量的擴大から考えて、絶對數の増加は合理的な現象といえる。このうち、ほぼ段階的に増加している諸葛亮と關羽では、諸葛亮

は明代で一位の曹操と逆轉。一方の關羽は、宋・明間での増加がことに著しいが、これは残り三人にも共通する傾向である。宋・明間における遺跡總數の増加率一・九倍に比して、關羽の二十三倍は極端としても、諸葛亮五・六倍、劉備三・八倍、張飛三・七倍（孫權二・六倍）と、個人の増加率が著しい。三國時代の實勢から考えれば、曹操に代表される魏の遺跡がもっとも多くてしかるべきだが、吳蜀の人物遺跡の割合が増加しているのは、この時期が三國故事の發展期と重なっていることと偶然ではあるまい。

本稿における意味づけとは異なり、遺跡本來の性格から考えれば、増加というのは不合理な現象であり、一定數を保つか、むしろ時代が下るにつれて減少してゆくのが自然であろう。その點において、總數の推移が比較的少なく、結果的に割合の減少している曹操と姜維の遺跡は、自然な姿を保っていると言えるが、故事の發展という面からみれば、絶對數が増加しないのは、人物の知名度ないしは人氣が低迷しているゆえともとれる。

一方、總數、割合ともに減少しているのが鄧艾だが、その理由として、鄧艾祠廟の諸葛亮への代替があることは、白帝廟の公孫述から劉備への改祀とともに、故事要素が特定の主

要人物に集中・統合されてゆく現象の一端として、前論文でも觸れた。⁵⁾

さらに、遺跡總數の分母が飛躍的に伸びている割には、個人の遺跡數が必ずしも伸びていない曹操・姜維と、順調に伸びている劉備・張飛らを比較すると、後者、ことに明清にかけて急増した部分には、祠廟の割合が多いことが見てとれる（圖II）。

(b) 遺跡と祠廟

祠廟は本來、地域に功績や恩惠のあつた靈を讃え、あるいは鎮める機能を持つものであつて、遺跡の中では比較的來源の古いものが多い一方、故事との關連は總體的に薄い。鄧艾を例にとると、入蜀に關連する四川・陝西境内のほか、京口・泗州・鳳陽など、江蘇・安徽にかけて祠廟の記録が點在するが、これらはいずれも鄧艾がこの地域に屯田し、灌漑・開墾事業に功績を擧げたことを讃えたものである。しかし、『演義』に代表される三國故事において、敵側の脇役に過ぎない鄧艾の屯田は、故事の中心に取り入れられるには至らなかったようである。また、明清に出現する姜維祠廟は、雅州（治：四川省雅安巿）・黎州（同・漢源縣）、維州（同・理縣）・

茂州（同・茂縣）と、いずれも成都以西に位置しており（地圖）、三國故事のいわゆる「九伐中原」の路線からは外れる。これらは北伐の遺跡ではなく、「維州：薛城，蜀劉禪時，蜀將姜維、馬忠等，討汶山叛羌，即此地也。今州城，即姜維故壘也」とあるように、これまた「演義」等の故事には採り上げられない、延熙十（二四七）年の汶山羌征討に由来している。



これらの祠廟は、地域に災害が起こったとき、その靈驗に應じて公の禳災の場ともなった^①。その際には、龍州鄧艾廟が知州によって破壊され、諸葛亮廟に改められたように、一地域においてのみ崇拜される人物より、全国的基準で評價される英雄の方が、より望ましい廟祀対象となつたろう。「大明一統志」において五箇所を数えた曹操祠廟が、「大清一統志」に全く記載されていないことは、その一箇の傍證となり得るのではなからうか。

明清代、諸葛亮・關羽ら、三國故事において活躍する英雄の祠廟が急増する一方で、曹操・鄧艾ら故事中の悪役のそれが減少傾向を見せるのは、「史實」をも壓倒する故事の普及力、いかなれば「物語」が「現實」を凌駕してゆく姿の現れであろう。

三 遺跡の地域的考察

次に、三國遺跡の各時代毎の分布状況をまとめると、【圖III】のようになる。

ここで見ると、歴代の延べ数が最も多いのは、蜀漢が國を置いた四川、荊州をめぐって三國が衝突した中盤戦の舞臺・湖北、官渡の戦いを初めとする故事前半の舞臺であり、魏の

都城となった河南の三箇所で、故事の高潮と遺跡数が比例することが見て取れる。しかし時代別に見れば、『元和郡縣志』では四川・河南について陝西、『太平寰宇記』では河北の遺跡が多く記録されているのに對し、『大明一統志』では湖北↓四川↓河南、『大清一統志』では四川↓湖北↓河南と、湖北における遺跡の急増が顯著である。

【圖III】 歷代三國遺跡の地理的分布

	元	和	太	平	大	明	大	清	計
北	5		※23		12		21		61
江	4		11		24		44		83
安	3		23		27		32		85
山	3		6		4		10		23
西	—		9		5		20		34
東	13		31		26		65		135
南	10		12		18		26		66
西	5		1		8		14		28
肅	—		6		11		22		39
江	—		11		66		107		191
北	7		—		28		41		72
南	3		—		79		96		232
川	18		39		—		—		—
建	—		—		1		2		3
東	—		—		1		2		3
西	—		—		2		2		4
南	—		—		11		60		71
州	—		—		5		26		31
計	72		173		328		590		1161

※：遼寧¹を含む

(a) 劉備・曹操關連遺跡の推移

これを主要人物単位で見た場合、まず劉備・關羽・張飛に關しては【圖IV】、曹操に關しては【圖V】となる。

史書によれば劉備らは、後漢の建安六（二〇一）年に荊州に入り、十三（二〇八）年まで新野に屯し、曹操の南征後、江陵（後の荊州府）に下った。以後の荊州滯在期間は、關羽が十年、張飛が五年、劉備に至ってはわずか二年で、中平元（二八四）年以來のかれらの活動歴から見れば、いずれも微たるものに過ぎない。にもかかわらず、劉備關連遺跡の延べ数は、湖北が四川を上回り、清代に限れば二位の四川（五例）に對して、一位の湖北が十一例と群を抜いている。これは孫夫人との結婚にまつわる遺跡の増加にみられるように、劉備に關する散發的な故事傳承が、主に荊州を舞臺として發展したことによるものだろう。¹²⁾

一方、曹操について見ると、『元和郡縣志』『太平寰宇記』に見える遺跡が、郷里の安徽を除いて北方に集中するのに對し、明清になると湖北や四川、湖南といった南方にも記載が現れ始める。ことに湖北には明清間で延べ六例が登場するが、これは明らかに赤壁故事の普及と關連があらう。¹³⁾

【圖IV】 劉備(L)・關羽(G)・張飛(Z) 關連遺跡の分布狀況

		元 和	太 平	大 明	大 清
湖 北	L	—	1	9	11
	G	—	—	7	12
	Z	—	1	2	6
四 川	L	1	3	6	5
	G	—	1	4	2
	Z	—	2	6	11
湖 南	L	—	—	3	3
	G	2	—	2	4
	Z	—	—	2	1
河 北	L	—	2	2	3
	G	—	—	1	7
	Z	—	—	—	2
河 南	L	—	—	2	1
	G	—	—	1	2
	Z	—	—	1	1
江 蘇	L	—	—	1	—
	G	—	—	1	3
山 西	G	—	—	1	3
貴 州	G	—	—	3	1
安 徽	G	—	—	1	—
甘 肅	G	—	—	1	—
貴 州	L	—	—	—	1
福 建	G	—	—	—	1

(b) 諸葛亮關連遺跡の特徴

次に、個人遺跡の延べ数が最も多い諸葛亮（圖VI）について見てみよう。

明清代に顕著な増加が見られるのは、隱棲地とされる河南

話的色彩が濃く、三國故事中における南征故事の異質さを傍證しているとも考えられるが、これについての検討はまたの機会に譲りたい。

南陽と湖北襄陽、建安十四（二〇九）年から約二年間駐屯した湖南衡州、建興三（二二六）年の南征で通過したとされる雲南・貴州の遺跡である。南征遺跡の飛躍的増加と比べれば、北伐故事の關連遺跡はさほど増えていないが、同様の現象は姜維においても見られ、『大清一統志』にみえる姜維關連遺跡十二例のうち、北伐に關するものはわずか三例に過ぎない。このように明代以後、雲南・貴州の遺跡が急増した背景には、元代の雲南開發が假託された可能性が考えられる。また湖南の遺跡も、候計山・諸葛營といった軍事行動を示唆する名稱から考えて、同様に地域開發が反映されている可能性がある。さらに南征關連の遺跡には、他地域の三國遺跡とは些か異なった民

【圖V】 曹操關連遺跡の分布狀況

	元 和	太 平	大 明	大 清
河 北	3	8	7	5
河 南	8	5	2	4
安 徽	1	4	9	5
山 西	2	2	—	1
湖 北	—	—	4	2
陝 西	—	—	1	2
遼 寧	—	1	—	—
四 川	—	—	1	—
山 東	—	—	—	1
江 蘇	—	—	—	1
湖 南	—	—	—	1

に集中して増加していることは、この地域が三國故事の發展の中心地であったことを示しており、ひいては赤壁の戦いを物語全體の要とする『演義』の構成とも、何らかの因果關係が想像されよう。

要するに、人物遺跡の多寡は、當該人物の活動期間や史書中の事蹟とは必ずしも一致せず、全體的に見て南漸の傾向にあることが見とれ、こ

三 結論と展望

以上、三國故事の主要人物の遺跡の變遷を概観すると、遺跡の消長にも故事のそれと同様に、幾つかの大きな力が作用していることが伺える。

第一に、『演義』の基調となつてもいる尊劉抑曹への流れと、三國故事をひとつの繼起的な物語にまとめあげてゆく上での人物形象の整理と一本化。第二に、おそらくはそれに關連して起こつた、遺跡全體の南漸傾向である。

言うまでもなく、中國文化は歴史上、數度の大きな南漸を経験しているが、主流文化の流傳は同時に、口承故事や地域傳承の流傳をも引き起こしたはずであり、これが遺跡に象徴される三國故事の要素を廣く南方にもたらしたのである。

このことは、以前に取り上げた戯曲的傳承土壤の變遷——張飛故事の雜劇偏在と、時間的推移に伴う減少——とも關連する問題であり、今後、地域・人物を絞り翔んだ、より細密な追跡調査を必要とする。さらに『演義』各種版本や、その出版狀況なども合わせて、より複合的な視野から検討を加えれば、地方志の調査研究は、三國故事の發展史に新たな觀點を提供し得るのではなからうか。

【圖VI】 諸葛亮関連遺跡の分布状況

	元和	太平	大明	大清
川南	7	13	38	43
雲南	—	—	10	41
陝西	3	3	10	11
湖北	—	—	9	17
湖南	1	—	7	17
貴州	—	—	2	20
甘肅	2	—	4	6
河南	—	—	4	5
江蘇	—	—	2	1
山西	—	—	1	2
山東	—	—	—	3
河北	—	—	—	3
安徽	—	—	1	1
廣西	—	—	1	—

注

(1) 拙稿《人物故事と傳承の土壤―『三國志演義』の成立をめぐって―》『中國文學研究』第18期（早稻田大學中國文學會）92年12月。

(2) 沈伯俊・譚良嘯：編著、巴蜀書社（成都）89年6月。

(3) 金良年：主編、上海古籍出版社 94年12月。

(4) 元和郡縣志・太平寰宇記・大清一統志は、文淵閣四庫全書影印本（臺灣商務印書館、86年3月）、大明一統志は天順五年禮監原刻影印本（三秦出版社、90年3月）。

(5) 《龍統と諸葛亮―三國故事における軍師像の變遷―》『中國文學研究』第21期（早稻田大學中國文學會）95年12月。

(6) 一般に祠廟は當該人物ゆかりの地に建てられるが、清代の關羽祠廟は必ずしもこの範疇に收まらない。ただし『大清一統志』では、各州縣治に文廟と併置された關羽祠廟までは一々採録していない。江蘇海門廳、福建泉州などの例外は、商業路に沿って傳播したものか。

(7) 『太平寰宇記』卷十六泗州、『大明一統志』卷七鳳陽府ならびに附記、『大清一統志』卷八十七鳳陽府。『大清一統志』によれば、鳳陽府鄧公廟の建立は唐の貞觀十五（六四一）年に溯るといふ。京口鄧艾廟については注5前掲論文の注（45）（46）を参照。

(8) 『魏書』第二十八鄧艾傳。ちなみに祠廟以外の遺跡でも、最多の『太平寰宇記』では、八例中三例が屯田関連のものである。

(9) 『舊唐書』卷四十一地理志四、劍南道の條。

(10) 『蜀書』第三後主傳、第十四姜維傳。

- (11) 「天子以歲久旱，所被者廣，分命守臣，禱其境內鬼神之有靈德在於人者」(曾鞏《諸葛武侯廟祈雨文》)
 「事歲大旱，禱雨輒應。嘉祐中，比數歲連熟，閩人以謂張侯之賜也。：候以智勇爲將：與魏將張郃相距於此，能破郃軍，以安此土，可謂功施於人矣。其歿也，又能澤而賜之，則其食於閩人不得而廢也，豈不宜哉」(曾鞏《閩州張侯廟記》)『曾鞏集』卷四十、十八 中華書局(北京) 84年11月。
- (12) 拙稿《三國故事の變容—(劉備過江) 故事をめぐって—》『學術研究』外國語・外國文學編 第42號(早稻田大學教育學部) 94年2月。
- (13) 例えば荊州の曹鞭巷(『大清一統志』卷二百六十八)は、赤壁から敗走する曹操が鞭を捨てたことから名付けられたという。注2前掲書四七〇頁、華容道の條を参照。
- (14) 南陽と襄陽の諸葛亮舊宅遺跡の變遷については、拙稿『三國演義』における道教思想(修士論文、92年1月提出)および『隆中・武當山・臥龍崗』(『中國古典小說研究動態』第六號、中國古典小說研究會、93年5月)。
- (15) 井上泰山・他『花關索傳の研究』(汲古書院、87年1月) 六九—七〇頁。
- (16) 『大明一統志』卷六十四衡州府、卷六十五永州府。『大清一統志』では卷二百八十一および二百八十二。

三國人物遺跡初探(土屋)

(17) 注1前掲論文。